

世界で進む脱米化

世界を眺める人々の目は、大国が流布する先入観にしばしばとらわれる。冷戦終結後、西側を支配していた「共産主義の脅威」が消えた空間に、いつの間にか「国際テロ」の脅威という新たな観念が差し込まれている。いづれも、メディアによって伝達される米国発のイデオロギー色が濃い。だが、イラク戦争の失敗などで米国の権威が失墜した今、日本とアジアの関係の在り方を考えてみる良い機会かもしれない。

(三浦元博共同通信編集委員)

アジアとの関係再考を

七月三十一日の「東南アジア諸国連合(ASEAN)プラス日中韓」外相会議に先立ち、北京で日本の国際アジア共同体学会と中国社会科学院日本研究所の共催による研究会が開かれた。討議には日中韓三カ国の研究者や元行政官らが参加し、「東アジア共同体の共通制度をつくる」のテーマで環境、安全保障、農業、開発援助など多彩な分野

の研究が報告された。共同体をめぐる多チャンネルの研究交流が進み出している。

の研究が報告された。共に基づく構造がある。地域の横の政治的つながりは希薄で、米国がアジアを制御しやすい仕組みになっている。冷戦時代の体制が続いているのは、

に基づく構造がある。地域の横の政治的つながりは希薄で、米国がアジアを制御しやすい仕組みになっている。冷戦時代の体制が続いているのは、

の脅威より、国境を越える環境汚染などの方が一層深刻になっているのだから、日米安保体制とは別に、非伝統的脅威の分野でこそ、独自の地域安保協力を進める余地がある」とする。

アジア外からも似た視線がそがれている。オランダのジャーナリストでアムステルダム大教授のカレル・V・ウォルフレン氏は、近著「日本人だけが知らないアメリカ『世界支配』の終わり」(徳間書店)で、時宜にかなった議論を展開している。

間違いに気付き、軌道修正を図っている、とウォルフレン氏は断言する。欧州は軍事優先の米国とは違う国際法順守の共同体として、中南米は自由市場主義による社会荒廃への恨みから、米国流社会経済システムを拒否しはじめた。ウォルフレン氏は、ことし十周年を迎えた「ASEANプラス3」の果たす統合の役割の大きさに、日本は気がつくべきだと強調する。

だが、世界で進む脱米化とは逆に、軍事関係から企業経営、司法制度まであらゆる面で日米一体化が急だ。米国流がもはや時代遅れなら、この辺で一度立ち止まるのも無駄ではあるまい。